



新 歯科進化論

< 1 >

赤司 征大

を抱えているのではないのでしょうか。



大学在学中に中小企業診断士という経営コンサルタントの国家資格を取得したのは、日本の歯科医療を取り巻く環境・抱える課題を客観視することで、

を経験しましたが、日本の歯科医療が良くなっているという実感の欠如からくる無力感がありました。無論これは先人たちが脈々と作り上げてきた現在の歯科医療のあり方への単純な否定ではなく、10年後、20年後、日本の歯科医療が社会的価値を高めながら産業として成長していくための戦略を、その時



ビジネススクールの導入とプロフェッショナルによる関連ビジネスへの参入ではなにかとの考えからです。

ビジネススクールでの経験は予想をはるかに超えていました。経営学や最先端の医療ビジネスを浴びるように学び、公共政策大学院との合同授業にも出席し、米国の医療制度やその改革の難しさへの理解を深めました。また、シリコンバレーを中心とする産業クラスターにおいて急速に高まる医療×ITの息吹を体感し、リサーチプロジェクトを通じて、米国と日本の歯科医療の根本的な違いについて学びました。

MBA留学で見えてきたのは日本の歯科医療の現状と、これからの日本の歯科医療が持つ可能性でした。その戦略について新たな視点から探っていきます。

(歯科医師、中小企業診断士、MBA)

祖父、父と続く歯科開業医の家に生まれ育ち、歯科医療を身近に感じていた私が歯学部に進学したのは自然な選択でした。そんな私が家業を継がず臨床からも離れ、米国のビジネススクールへの進学を決断したのは日本の歯科医療が持つ産業としての可能性を知るためでした。

日本の歯科医療を取り巻く環境は時代と共に大きく変化してきました。戦後の復興から80年代後半までの祖父の時代は、むし歯の洪水と歯科医師不足の中で、人口増加・経済成長に伴う医療費上昇の恩恵を受けてきました。70年代後半から現在に至る父の時代は、歯科疾患の減少・歯科医師数の増加に加え、バブル経済崩壊後の失われた20年を経験してきました。そして、超少子高齢化時代の歯科医療の担い手として私たちの世代は生きていきます。祖父の世代は経済的に豊かであり、父の世代から徐々に陰りが見え、私たちの世代は歯科医療のみならず国家という意味合いでも未来に対する不安感や閉塞感

MBA留学で見えてきた日本の歯科医療の明日

歯科医療のエコシステム・その本質を知り、未来への糸口を見いだせるのではないかとこの考えからでした。そして卒業後は、両方のライセンスを生かせる大規模な歯科医療法人でのキャリアを選択しました。

歯科医師として患者さんの健康に寄与する喜びを知り、マネジャーとして歯科医師目線でのマネジメントの導入

代を生きていく私たちの世代が見いだせないでいることからくる無力感でした。



私がビジネススクールへ進学したものは、医療界を革新していく上で必要なのは医療へのより高い視座でのマ